

印度に於ける初期淨土教の意圖するもの

結 城 令 聞

「初期淨土教」とは初期淨土經典に出てくる阿彌陀佛思想のこと、「意圖するもの」とは、何故にさうした經典が世に出ねばならなかつたかと云ふ理由を探り、阿彌陀佛思想が何を主張せんとしてゐるかを看取せんとするものである。従つてここでは、經典に出てくる法藏の説話とか、極樂の莊嚴とかが、どんな資料が累積して今の様になつたかと云ふ様なことを云はんとするのでなく、それが如何なる歴史的な意味を背負つて構想されたかと云ふ、經典結集者の意圖を探らんとするものである。

これは何も淨土經典だけの問題でなく、大乘一般に通ずる問題であるが、大乘經典、或は大乘思想の成立を論ずる場合、學者はたいいてい阿含より大乘へ、佛説の唯一の手懸りとして阿含を考へ、阿含こそ佛説に近く、大乘は後世の夾雜物の附加されたもの、特に淨土教の如きはその雄なるもの、而

して後世の交雜的資料の累積加重されていく跡づけを試みることによつて、それを論證しようとしてきた様である。阿含や部派の所説中に、大乘に似た説、或は進歩的と考へられる説があると、それを抽象し、それこそが大乘の起源を爲すもの、それへ、時代の下るに従つて種々なる夾雜物が加重し、遂に大乘の成立となつたと云ふ様な説を見受けるが、それは全く右の如き立場から、大乘の成立を見出していかうとしてゐるものである。それも一方法であるかも知れない。然し私は、そんな抽象的な見方で、果して大乘の起源を把へうるであらうかについて疑問をもつ。否そんな方法でよいのか、方法自體についてさへ納得出来ない様に思ふ。少なくとも然うした方法では、大乘興起の歴史的意味などは全く見出せないと考へる。それは即ち、阿含に主體を置く阿含研究の態度であつて大乘に對する態度ではない。西紀前後頃、突如、然も陸續として現はれた、般若、華嚴、法華、無量壽、維摩等の諸大乘經には、それが現はれざるを得なかつた必然的な意

味、歴史的な契機がなければならなかつたと思ふ。大乘の興起については、資料がどう加重せられていつたかと云ふことの以前に、何故にそれが現はれねばならなかつたかと云ふ、より本質的な問題があるのであり、その解明を無視しては、經典結集者の意圖などは把握出来るものでないと思ふ。

二

大乘とか小乗とかと云つても、もともと佛説に根據してゐるのであるから、共同的なものがあるのは云ふまでもない。或は又大乘經典中に於ても、最初期の八千頌般若の如きが、南方大衆部を基盤として成立したのであらうと云はれてゐる如き、大小兩乗が極く自然的に結ばれてゐるものもある。然しだからと云つて、類似點を抽象的にとらへ、何でも大乘でさへあれば、より以後の成立なるが故に、より以前の阿含や部派から出たものであるとするのは當を得たものでない様と思ふ。私がこうした考へ方になる様になつたのには次の様な諸種の理由による。

1、佛在世時代の敎團組織は、出家と在家との兩者から成立してゐる。具足戒でかためられた出家と、三歸五戒を條件としてゐる在家の人々との間には、佛説自體も相違してゐたであらうが、たとひ同一佛説であつた場合であつても、時代の経過と共に兩者の間には、生活條件の相違からくる自づか

らなる結果として、その理解の仕方に相當の相違を來すことは當然である。

2、マハーヴァンサによれば、佛滅の年、大迦葉が王舍城の七葉窟で、五百人の比丘を集めて第一回目の結集をしたが、その時富蘭那は、五百の比丘を率ひて南山に在り、大迦葉の結集によるものと、食法に關して意見を異にし、自ら世尊に聽けるが如く受持すべしと云つて大迦葉の結集に同意しなかつたと傳へられてゐる。勿論善意からではあるが、結集が上座の敎團統制に、都合のよい様にせられたものであらうことは容易に推定しうる。

3、今日の阿含は出家敎團たる部派の傳承したもので、その性格が大體に於て出家中心のものである。故に若しそれで以て、當時の佛教全體を表はすものと考へるならば、それは非常な偏頗な考へ方で、出家敎團のささへ手として重要な役割をなし、佛の精神を規範として實踐してきた在家敎團の存在を忘れてゐることになる。在家中心の結集はなかつたにしても、在家敎團中に流れてゐた佛教精神は、自づから出家敎團のそれとは異つた形で、必ずや在家敎團の人々に活潑に繼承されていつたと考へても何等非理はない筈である。

4、佛滅後の佛教史が、今のところ出家敎團の歴史、部派の歴史と云ふ形で編纂されてゐて、その支持者たる在家の信者群が顧みられてゐない。然う云ふ歴史の見方では、單に歴

史だけでなく、佛教精神の把へ方についても缺陷を生ずるであらう。

5、初期大乘經典たる般若、華嚴、十地、法華、淨土、維摩等が世に出だしたのは、大體紀元前一世紀頃から約二世紀間に亘つてゐるが、その頃が、恰も部派分裂の最終段階や以前の頃であることは注目に價する。

6、所がその頃の大乘經典の性格をみると、大體に於て部派佛教への反抗、或は批判と云ふことが共通的である。而して同一批判でも、般若の如く部派を地盤としてその上に興りうるもの、否必ずしも部派の説によるまでもなく、佛説として部派と共通的なものの上にある般若の如きものもあるが、同時に部派の出家教團を地盤としてはどうしても芽生へ得ない様なもの、全く部派へのレヂスタンスとして成立してゐると考へられるものもあるのである。例せば法華の一乘三乗の如きは、全く部派への批判であるがその批判の如き、或は「小乗に食著する三藏の學者に親近せざれ」（安樂行品）と云つたのは未だしも、常不輕菩薩比丘が、四衆に對して禮拜を行ふが如き、所謂の禮俗のことは小乗戒に於ては明らかに破戒となつてゐるその破戒行爲が、善美なるものとしてすめられてゐるが如きは、とうてい出家教團や部派を地盤としては育たない性格のものなのである。その他華嚴の入法界品に於ける善財童子が、求道の過程に於て、婆羅門、童男、童

女、船師、香商、比丘尼などを往訪して求道してゐること、或はこの經の會座で、迦葉、舍利弗、目蓮等の佛の大弟子が、如瞿如呬として扱はれてゐること、或は維摩經に於ける佛の大弟子上座の比丘が、在家の老翁維摩に彈呵せられてゐるが如き、これらの構想は、出家者たる部派の人々の中から生れ出たと云ふよりも、寧ろ他の地盤、即ち從來佛教史の表面に出なかつた。然し嚴然として事實存在してゐて、佛陀への信仰を持ちつづけてきた在家の信者群を地盤として生み出されたものだと思ふのは決して無理とは思はない。即ち當時の教團擔當者たる部派の出家の、餘りにも無氣力にして枯渴した狀態に對して、レヂスタンスとしてけつ起した在家の信者群を地盤として、多くの大乘經典が生み出されたのではないであらうか。

7、一方部派の狀態をみると、滅後第三百年に有部から分派した化地部に、僧中有佛説が唱へられてゐる。大毘婆沙論百三十によると「若唯施佛、但佛應受、衆不_レ受故福爲劣、若施僧衆、僧衆與佛、俱應_レ納受、故福爲勝、」と稱してゐるのであり、宗輪論では「僧中有佛故施僧者便獲大果、一非_レ別施佛、佛與三乘皆同一道、同一解脫」となつてゐる。化地部が有部より分派するや、直ぐその化地部より法藏部が分派してしまつた。法藏部の説によると、宗輪論に「佛雖_レ在僧中所攝然別施佛果大非_レ僧、佛與三乘解脫雖_レ一

而聖道異」とある如く、佛に施すと僧に施すとの果について、化地部が同とするについて異と唱へたのであるから、この問題は確かに法藏部が化地部から離れる原因の一つとなつてゐると思ふのであるが、一體どうして然う云ふことが問題となつたのであらうか。人々は、佛に供養するよりも現實の生きた教團に供養することをすすめた化地部の主張を、大衆部的大乗的だと云うてゐるが、化地部は現に上座部系の有部から分派したのであるから、然う安易にその事を以て大衆部的だなどと云へないと思ふし、又それが同時に大乘的だと云ふのも餘りにも便宜主義的だと思ふ。この時代は恰も初期大乘運動が開始され、その結果としてやがて大乘經典が世に出る時期である。既に述べた如く、大乘運動は沈滞せる部派教團への批判であり反抗であり、同時に佛陀への復歸運動である。この大乘運動に動搖を感じた部派が、僧伽擁護の對抗運動として發言した主張が、化地部の説となつて現はれてゐるのでないかと憶測するわけである。

三

以上のような色々な材料をならべてみた結果、結局私には次の様に考へられてくる。部派の進歩的なものから大乘が出てくることもあるであらうが、大乘運動の本筋は、必ずしも部派からでなく、むしろ佛滅後表面に出なかつた在家教團の人

印度に於ける初期淨土教の意圖するもの（結城）

々の、革進的な意味での釋尊への復歸運動、それではなかつたかと思ふのである。而してその運動に附隨して現はれた大乘經典は、それぞれの問題に對する使命を帯びてゐるわけであるが、今私がここに題目としてあげてゐる淨土經典について云ふならば、それは釋尊を如何に理解すべきかと云ふ問題について、小乗部派の理解に對決を求めんとしたものであり、自己の見解を表白したものだと思ふことが出来ると思ふ。從來の學者は、阿彌陀佛を、阿含に於ける古仙とか過去佛とか、寧ろ釋尊と別なる佛の發展したものとしてその跡づけに苦心してゐるのであり、又釋尊に、實際然うした自己以外の佛を認めた痕跡があるであらうかと云ふことについて心を碎いてゐる様であるが、私は然う云ふ抽象的な考へ方を探りたくない。阿彌陀佛信仰、淨土教運動が最初に表面化したのは、印度の西北部であると云ふことは學者の一般に云ふ所であるが、（然うでないとしても支障はないが）若し然うだとすると、これはやはり當時西北印度地域一帯に教勢を張つてゐた、有部等の部派の人々の釋尊理解への批判とし、又對決として現はれたものでないかと考へる。必ずしも有部に限る必要はない。一般に部派的な考へ方からすると、八十入滅の釋尊を理解するのに、涅槃の體擇滅なりとして、滅後の釋尊を殆んど虛無化してゐたのである。在家教團の一員として加入してゐる文學者や藝術家が、部派的なそんな釋尊理解で満

足するわけがないであらう。同時に在家教團の人々から云ふと、滅後の釋尊を虛無化する所に、今日の部派の廢類があるとみてとつたのに相違ないのである。だからこそ積極的な釋尊觀、即ち阿彌陀佛思想が一つの問題として提起されたのではないかと思ふ。釋尊の偉さ、永遠性に對する佛教徒の思慕は、佛滅の直後より法身思想となつて現はれ、更に菩薩思想、本生譚等の如きものを發生せしめてゐるのであるが、これらは何れも佛教徒の釋尊理解の一表現である。かうした理解の仕方をする流派の人々が、これこそ釋尊の眞實相であるとして示したのが、實に大無量壽經であつたわけである。この經の組織構造については今は觸れないが、要するにこの經では、釋尊をして阿彌陀佛を語らしめてゐる構造となつてゐるが、それは實に釋尊をして釋尊自體を語らしめてゐることなのである。阿彌陀佛を見るものこそ實に釋尊を見るものであると云ふことを主張せんとするのが、この大無量壽經の結集者の意圖なのである。

四

法華經の如きは久遠の釋迦を立てて眞實の釋尊を表現してゐるが、大無量壽經の如きも、若し眞實の釋尊を説かんとするのであるならば、何故に法華經の如く釋尊の名を以てしなかつたのであらうかと云ふ疑問が起つてくる。それについて

は兩面から答へうと思ふ。第一には釋尊を表はすに釋尊以外の名を以てするのは、佛教文學一般の表現形式であつたので、その方法が用ひられてゐると云ふこと。次に第二には、釋迦の名を以てするよりも阿彌陀佛の名を以てする方が、表現方法としてすぐれてゐる。このことについては嘗つて既に述べたことがあるから茲では省略する。

（この報告は文部省科學研究費によるもの）。

新刊紹介

1

干潟龍祥 「本生經類の思想史的研究」

緒言

本論

第一章 Jataka (本生談、本生話、本生經、本生)

第二章 本生經類の自然的發達

第三章 菩薩思想の起源及發達と本生經類との關係

第四章 本生經類集成本の研究

第五章 大乘誌經典の成立と本生經との關係

結語

別冊附篇 本生經類照合

(A5 本文一八八頁 別冊一五七頁 東洋文庫)